

〔講演〕

## 東亜同文書院大学から愛知大学へ

東亜同文書院大学記念センター長 馬場 毅

**小林** それではお時間になりましたので、第2部の講演を始めたいと思います。講師の紹介を致します。馬場毅先生です。馬場毅先生の専門は中国近現代史です。1944年埼玉県生まれ、早稲田大学第一文学部卒業、東京教育大学大学院に進まれ早稲田大学で博士(文学)の学位を取得されました。その後、東京都立高校教諭を経て、1997年より愛知大学、現代中国学部教授に就任、更に2011年より愛知大学東亜同文書院大学記念センターのセンター長に就任し、現在に至っております。主な著書、論文は『近代中国華北民衆と紅槍会』、「孫文と山田兄弟」、「近代中国華北農村の水利組織と村落 宗教圏問題」など多数ございます。それでは、馬場先生宜しくお願い致します。

**馬場** ただ今ご紹介にあがりました馬場と申します。宜しくお願い致します。今日はお話するのは、横山先生のお話を受けて「東亜同文書院大学から愛知大学へ」というお話をさせていただきます。東亜同文書院大学のことを考えますと、まず経営母体として、東亜同文会というのがありました。東亜同文会が経営していたものが東亜同文書院、後に大学になりますけれども、東亜同文書院を経営していました東亜同文会は、同時に中国人留学生も教育をするというのは最初からやっております、最初それは東京でやっておりました。併行して南京でもやるんですけども、南京の学校が潰れたものですから、東京でやりました。後に、上海の東亜同文書院において中国人学生を教育するようなことをやりました。

最初にまず、母体である東亜同文会のことか

らちょっと、お話をしたいと思います。一応、題としては東亜同文書院が出来るまでというふうに申し上げましたけども、この東亜同文書院に関係あるところで、まず最初に岸田吟香がいて、この人物は幕末、ヘボン、これはかなり年配の方は、確かローマ字表記でヘボン式っていうのがあったのをご存じだと思います。私もヘボン式っていうのは習ったことがありますけれども、そのヘボンは実は英語の教育というか、英語教育の点では非常に先覚者でありまして、それを岸田吟香がそれを受けたということになります。岸田吟香はヘボンから英語を学びまして、上海に渡り、『和英語林集成』という辞書ですね。それを翻訳担当しました。これは当時日本でできなかったために印刷を上海でやったと言われていいます。それから目録をヘボンから学んで上海に





す。そういう天地会とか哥老会は「反清復明」という清に反対して漢王朝、漢民族の王朝であった明を復興せよということ、彼らは設立の目的だと言っていましたので、孫文がそこと手を組んだ。そういう組織について平山周が紹介しております。一方同文会の方なんですけど、これが近衛篤磨、先程の近衛霞山ですけども、貴族院の議長も務め同時に政治的に発言もして、かなり貴族の中では政治的な意味でのリーダーとして一目も二目も置かれていた。先程の漢口にありました楽善堂の関係で宗方小太郎、それから荒尾精が作った日清貿易研究所の関係で白岩竜平。この人は後に資本家として有名になります。それから最初に出てきました岸田吟香、目薬やヘボンとの関係については先ほど述べました。それから近衛の側近でありました大内暢三、後に東亜同文書院の院長になります。同文会の方がどちらかという、このように日清貿易研究所とか、漢口楽善堂とか、中国とのビジネス活動に携わった実務派が多いと思います。

この東亜会と同文会が合併して東亜同文会が1898年に出来ます。会長が近衛篤磨で幹事長が、これは東亜会の系統のジャーナリストであった陸羯南。その綱領の中で「支那を保全する」、中国と今は言うべきでしょうけど、当時の言葉ですから、一応そのまま使わせていただきます。「支那及び朝鮮の改善を保全する」ということを掲げています。この段階で東亜会と同文会と合併するときに大きな問題になったのは梁啓超、すなわち清朝の改革をやろうとして保守派のクーデターによって追われて清朝から、まさに亡命者、お尋ね者として睨まれているわけですね。梁啓超を入れるかどうかというのが大きな問題になりまして、結局東亜同文会が出来た時に梁啓超達は正式な会員ではなく、会友となります。つまり、東亜同文会というのは中国内部の政治党派とは一線を画しつつ、同時に注意書では、はっきりと清朝体制の維持を明確にしています。これは同文会の路線だというふうには私には思います。先程、横山先生は孫文と長崎の関係、つまり革命派と長崎の関係を述べられているんですけど、東亜同文会は実は革命派どころか、清朝

の下での立憲改革をしようとしていた梁啓超のグループとも一線を画すという清朝体制の維持ということ、これを明確にしております。ただ、今日の本題ではないのでお話し致しませんが、そうは言っても、孫文の革命運動を終生支援した山田純三郎とか、これは東亜同文書院の第1期入学者ですし、それから1900年の広東省広州の蜂起に参加して日本人で最初に戦死した、つまり孫文の革命を支援して戦死した山田良政という人物もいるんですけど、基本的には東亜同文会が清朝体制維持です。

東亜同文会が最初の教育文化事業が南京に作った同文書院なんですけど、近衛会長が南京や上海を統治していました両江総督、劉坤一という清朝の高官と会って、その援助を得て作りました。初代院長は根津一です。ただし、1900年に排外主義的性格を持ち最初キリスト教徒を襲撃し、更に外国人を攻撃し、最後は北京の公使館区域を攻撃した義和団事件のため、この影響が南京に及んで来て、南京同文書院は日本人と中国人の教育を始めていたんですが、結局これは存続できませんでした。そして、上海の東亜同文書院に併合されます。従って、1901年の東亜同文書院の上海での設置をもって、東亜同文書院の始まりというふうにするんですが。

もう一つ、実は、東京同文書院なんですけど、これは清国人留学生のために作られます。つまり、東京同文書院の方が南京同文書院よりも早いんですけども、最初は近衛篤磨が張之洞という、これも清朝の高官がいますけれども、その孫を日本で預かって、そして学習院で教える。近衛さんが、その孫を入れるために作ったのが元々の東京同文書院です。ですから1899年創設したんですが、その時には1人しかいなかったわけです。ところが、1901年、義和団が鎮圧された後、中国の日本留学生が非常に増加します。何故増加したのかというと、日清戦争で中国が負けたというのは非常に中国人にとってショックだったわけで、何故日本が勝てたのかという原因の1つに、日本はいち早く欧米文化を取り入れたことがありました。欧米文化を取り入れるには、本当は欧米に行けば良いんですけど、し



かし距離が離れているし、費用も掛かる。日本ならば距離は近いし、漢字もまさに同文なわけで、ある程度意味も分かるだろうということで、大量の日本留学者が増加してきます。この敷地は基本的に近衛篤麿の持っていた土地を転々として、この1905年の11月というのは丁度6回目の校地です。北豊島郡落合村下落合という。現在ですと、東京の高田馬場の近くのところに校舎を移転します。ここで中国人留学生を受け入れて、これは日本の高等専門学校へ進む予備学校でありました。当時旧制中学程度の普通学と言っていましたけども、国語とか、社会とか理科とか、それから当時清国人のやっていなかった体育もやっています。日本語と、そういう国社数理などの普通学を教えて課程は2年です。この創立期に派遣されてくるのは、張之洞が当時、湖広総督(湖北省や湖南省を統治する)ですので、特に湖北出身者が多いですけども、そういう留学生。もう一つ、同文書堂というのは東亜同文会関係者が福建省に作った日本語の学校です。そこから派遣された留学生が多かったんですが、大体まとめると清朝の中央、特に地方官僚から派遣されたものが非常に多かった。ですから、清国のエリート層予備軍でありまして、後に、大体1905年位から徐々に中堅層まで広がってきます。1914年までに中国人留学生3,000名が入学しています。ただし、1915年、日本が第一次世界大戦でヨーロッパ諸国がヨーロッパ戦線で大変、そちらの方で全精力を集中しなくちゃいけない時に、大隈内閣の下で利権拡大の21カ条要求をやって大規模な反日運動起きます。それから1919年の五四運動。すなわち第一次世界大戦で日本が軍事占領した山東省ですが、中国は第一次世界大戦時、英仏側について参戦したわけで、つまり戦勝国だったわけですけど、ヴェルサイユ講和会議でも山東省を中国に戻さなかったのが、1919年の5月4日、天安門広場で学生達が大規模な反日運動を始めたことから始まる五四運動。この二つを契機にして留学生が激減して閉校します。これが1922年ですが、東亜同文会は、もう日本に来た留学生を教えるんじゃなくて、中国にいる中国人を教育し

ようとして、上海の東亜同文書院に中華学生部というのを後に作ります。

特に東京同文書院で申し上げておこなうてはいけないのが、ベトナムの留学生を受け入れたことです。ベトナムの独立運動家であるファン・ボイ・チャウの東遊運動、これは日本に留学生を派遣して当時フランスの植民地であったベトナムの独立運動を担う若い人達を養成しようという運動です。東遊運動、ベトナム語でドンズーと言うようですけども。これは大変有名な話でありまして、今高校の世界史の教科書にも出てるんですね。ところが、それを受け入れた最大の学校が東京同文書院であるということは、どこの教科書にも出てない。私、愛大の関係者としては非常に残念なんですけども。ベトナム人留学生が来るのは1906年から8年までなんですが、東京同文書院は彼らを清国人と称します。これはフランスとの関係がありますので、いわばフランスの統治をひっくり返すような人間を養成するというのを、公然とはできないわけですから、清国人と称しています。

実は今年の4月にNHKインターナショナルとベトナムのテレビ局が私どもの東亜同文書院大学記念センターに取材に来ました。これは、今年ベトナム戦争以後、日本とベトナムが国交を結んで40周年であり、それを記念したファン・ボイ・チャウについてのノンフィクション番組を作るにあたって東京同文書院についての資料が愛知大学にあるかということで取材に来ました。残念ながら東京同文書院についてはほとんどありませんでした。例えば、東亜同文会の報告等見ても、一切出てこないんですね。ところが、先ほど横山先生のお話になっていた、外務省の記録とか、ベトナムのファン・ボイ・チャウの記録にはっきり出ているんですね。東京同文書院でベトナム人学生を教育したことを。東亜同文会側が日本政府との関係で記録を残さなかった。先週の日曜日、例の「半沢直樹」が終わった後、あれは東京のTBSだと思んですが、「パートナー」というドラマが放映されて、皆様の中にもご覧になった方いらっしゃると思うんですけど、私はあのドラマは非常に取材が不足してるという

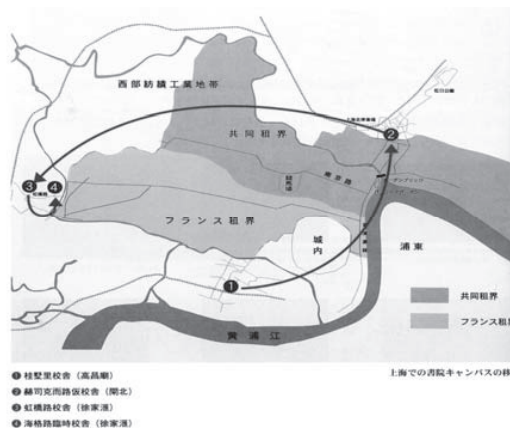
ふうに思います。どこが不足しているかと言いますと、ファン・ボイ・チャウの記録には一切出てこない内容を、浅羽佐喜太郎に關係している村の人たちの伝承を基にしてドラマ化していることです。実はTBSさんがドラマ化の準備をしているというのはNHKさんから聞きました。私の方に、TBSと言いませんでしたけど、「番組を作っていますけど接触ありましたか」と言われたんで、「ありません」と言って実際最後までなかったんですけど。別に接触しなかったからというんじゃないですが、例えばあのドラマで言うと、何か海、砂浜だったかな、怪我してるファン・ボイ・チャウを浅羽佐喜太郎が、それを治してそれが両者の最初の出会いだという見方しているんですが。これは、今のところ伝承だけで、資料的な裏付けはないんですね。ただそういうふうな話が村には伝わっていることは事実です。但し、ファン・ボイ・チャウはどう書いてるかという、浅羽佐喜太郎とベトナム人との接触の最初は東京同文書院に入っていた留学生の1人が、学費を払わなくちゃいけないし、親の仕送りで来てるわけですけども、非常に生活が困窮して、東京の街中で倒れてしまった。そこを、1人の日本人が来て助けた。その人は名も告げずに去ったと。ところが、その人の話が別の時に新聞に出た。それが浅羽佐喜太郎だという話で出てくるんですね。ドラマの後の方で浅羽佐喜太郎がファン・ボイ・チャウに大変なお金を援助したという事が出てきますが、あれは間違いのないと思います。伝承を基にしまして、東京同文書院に入ったことを浅羽佐喜太郎が仲介したというふうな話の筋になってるんですけど。

ファン・ボイ・チャウが書いているのを読むと、当時横浜に亡命していた梁啓超にファン・ボイ・チャウが会いに行った。そこで、独立のために日本政府に対して武器援助をやって欲しいという要請について相談したところ、梁啓超がそれは無理だろうということを言って、梁啓超と既に交際のあった大隈重信とか、犬養毅、それから犬養の下にいた柏原文太郎、この人物は東京同文書院の副院長を後に勤めます。それから根津一の名前も出てきます。こういう人達が関与し

て東京同文書院に入れるということになります。つまり浅羽佐喜太郎が仲介したのではないということですが、これはファン・ボイ・チャウの記録です。それから、クオン・デというベトナム最後の王朝、阮朝というのがありますけども、その王族のクオン・デも日本に入ってきます。こういう人達を含めて最大100人、あるいは200人日本へ入って来てるんですけど、こういう人達は実際には密出国だと思いますが、彼らは直接来るんじゃないんで、ファン・ボイ・チャウもまず香港に行って、恐らく私は想像してるんですけど、清国人であるという証明等を、当時の中国ですから、今でも中国の人は盛んに公文書でも偽造しますが、昔の話ですからもったやすく手に入れる。それで入って来たんだと思うんですよ。日本の入国審査を越える時、問題なく越えてきます。しかも100人の人間、あるいは200人の人間が仮に密入国というかたちでは入れないと思うんですね。というのは要するに清国人と称して入って来たということ。その内60名、東京同文書院に入学させています。ところが、1907年に日本は日仏協約を結んで、日仏の間で中国に於ける勢力範囲を認め合うとともに、フランスのインドシナ支配を日本は認める。それからフランスは日本の朝鮮支配を認めるということで日本政府はよりフランス政府の意向を受け入れざるを得なくなった。それで、とうとう日本政府の命令によって、この東遊運動に来た留学生の解散命令が1908年に出ます。この間、日本の警察は一生懸命リーダーであったクオン・デとファン・ボイ・チャウの後を追ってるわけですけども。外務省に残されている日本の警察の記録ですけど、1908年5月から12月までファン・ボイ・チャウの行方が分からなくなる。日本の警察は、これは恐らく東京同文書院の寄宿舎にかくまれたんだらうという推測をしています。つまり、解散命令の時期を挟んでいるんですけど、東京同文書院は日本政府の意に反して寄宿舎にかくまっている。でも日本政府は最終的にはクオン・デとファン・ボイ・チャウを国外追放にしました。ファン・ボイ・チャウは今度は中国に行って孫文を頼みにして革命運動を継続します。これは、東京同文書とベト

ナムの独立運動との関係です。

それから、上海同文書院ですけれども、院長である根津一は、荒尾の作った日清貿易研究所のカリキュラムを継承して、同じように中国人の買弁を用いず、日本人は直に中国との貿易をやるとういうふうに、そういうことを目的として、貿易実務を学ぶ専門学校として設立をする。両江総督、劉坤一の援助もあって、これは外国人租界外に作られます。最初の校舎、高昌廟にあった上海語でクイシュリと読むようですけれども桂墅里校舎。後に1913年の第二革命、今大変詳しい第二革命のお話が横山先生からありましたけれども、その時に上海の近くの黄浦江に袁世凱側の軍艦が停泊して、革命側はこの桂墅里校舎の近くに清朝の武器工場、製造工場であった江南製造局というのがありまして、そこに布陣してそれに対して艦砲射撃をくらって、その余波で焼かれたと言われています。その後8月から10月まで現在の大村市にある正法寺と本経寺を借り仮校舎を設置を借りて仮校舎を設置した。これが東亜同文書院が長崎に校舎を設置した最初になります。これは但し、第二革命の後なんです。この図を見ていただきたいのですが、これは最初の校舎です。ここにあった。艦砲射撃くらってそれで焼けちゃったという。この2番目の校舎も中国にあった仮校舎がありますけど、長崎の校舎の後にここに移る。それから3番目はここ、虹橋路という虹橋路にありました。4番目は最後の校舎で日中戦争中、疎開をした上海交通大学の校舎の跡地を借りました。すべて租界の外に置かれています。但し、租界の外に置



かれても租界地と同じような特権は持っています。ここがフランス租界で、北は共同租界で、イギリスの工部局という役所が、実質的な行政権利を発揮してますけど、その中に日本の租界等もその中に含まれるということになります。

これが大変見にくいですけど、1908年の東亜同文書院のスタッフと担当科目です(表1)。院長である根津一は儒学の教養があり倫理を担当しています。あと法律、経済とか、商業、それから語学、中国語、英語、尺牘というのは中国語の中でも特別なビジネス関係の中国語です。これを見ていただければ、お分かりのように、貿易の実務を担う学生を養成するためのカリキュラムが組まれているということになると思います。

それから、第二革命、焼けた後ですね、大村の仮校舎、正法寺とお読みするんでしょうか。その前のところですね。ちょっと写真があんまり良くないものですが、ちょっとぼけていると思います。それから、これは授業風景ですね。お寺の中でやったわけです。東亜同文書院というのは元々、寮を完備してますので、東京同文書院もそうですけれども。お寺だからいいのかなと思いますね。共同宿舎があるから。

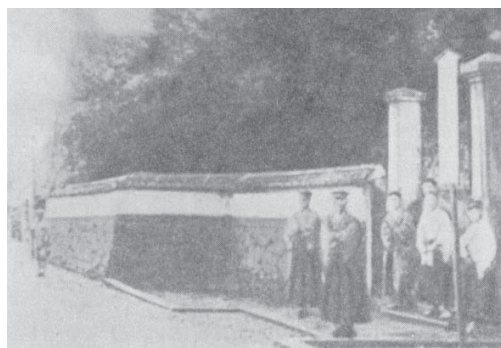




表1 初期の東亜同文書院のスタッフと担当科目(1908年)

職名	氏名	就職年月日	担当科目
院長	根津 一	明治35. 5. 5	倫理
教授	法学士・上野 真正	41. 4. 15	
	法学士・福岡禄太郎	36. 10	法律、政治
同	法学士・田部 環	40. 12. 7	経済、財政
同	文学士・大村 欣一	40. 7. 28	制度、外交史、通商史
同	商業学士・森川一甫	38. 9. 9	商業学、簿記、商業実践
同	商業学士・中川精吉	39. 12. 1	商業学、簿記
同	布施 知 足	40. 1. 21	英語
同	青木 喬 喬	41. 12. 6	中国語
同	橋詰 照 江	41. 4. 13	漢文、尺牘、時文
助教授	三木 基 市	41. 3. 23	中国語
同	松永 千 秋	40. 1. 28	中国語、制度
同	富岡 幸 三郎	40. 7. 28	中国語、商品学、商業地理
助教授兼監察	小田 勝 太郎	40. 3. 28	習字
幹事兼監察	和田 連 次郎	41. 4. 27	
講師	神津 助 太郎	41. 1. 8	商業慣習
同	沈文 藻(字、少坪)	39. 9. 2	尺牘
同	端 瑛(字、露如)		中国語
講師	全 寿(字、介生)		中国語
同	述 功(字、建助)		中国語
同	ミス・フ ィ ン	40. 10. 22	英語
同	ミセス・ハ ー プ	4. 1. 14	英語
會計係	安河内 弘	39. 10	
事務員	佐藤 喜 平次	4. 5. 1	
同	田 中 末 次郎	41. 5. 1	
校医	品川 賢 齋	40. 5. 23	
武術部 總監	小田 勝 太郎		
武術部 講師	安河内 弘		

(『東亜同文書院大学史』より)

東亜同文書院の性格について、これから4点にまとめてお話をさせていただきます。そもそも東亜同文会がアジア主義的性格をもっておりますので、それを体現している。日本政府はご存知のように、「脱亜入欧」ということを唱えているわけで、いわば国造りのモデルを欧米に求めているわけですが、東亜同文会は支那保全、すなわち中国の領土分割に反対するということを唱え、それにみられるように非常にアジア主義的な性格を持っています。それは東亜同文書院の開校時の東亜同文書院要領の興学要旨、これは東亜同文会の趣旨を受けていますけど、東亜同文書院はどういうことを目的にして作ったのかというと、「中外の実学を講じて、中日の英才を教え、一には以て中国富強の基を立て、一には以て中日揖協の根を固む。期する所は中国を保全して、東亜久安の策を定め、宇内永和の計を立つるに在り」とあります。簡単に言いますと、要するに、実学を学び、日本人だけではなく、中国人の人材養成も行って、中国の富強の基礎を固めて日中連携し、列強からの東亜保全、東アジアの保全ということを目的とする、というこ

とを言っています。この段階では日本は台湾を植民地化していますけど、日清戦争の後の三国干渉には対抗できなくて、遼東半島を返しました。そういう意味では日本は弱小国でした。その点では、私は分割の危機を迎えていた中国と共通の状況であり、東亜同文書院の掲げた日中連携の理念は現実的実現性の可能性を持っていたと思います。これは日中じゃなくて、例えばベトナムを含んで、何故東亜同文会を経営した東京同文書院がファン・ボイ・チャウ達を受け入れたのかという、これは基本的にはこういうところからきているものなのだというふうに考えられるんじゃないかと思っております。但し、その後日露戦争後の列強化、帝国支配下による一方で中国は、いわゆる半植民地化が進むという、日中の状況の違いと、それから15年の21カ条要求、以後の対中侵略の展開、更に対中関係の緊張、そういう意味では日中連携の現実的可能性は徐々に失われていったと思います。但し、現実的可能性でありまして、東亜同文会は最後までアジア主義というのは、私は下ろしてないというふうに思います。

それから二つ目の特色ですが、現地主義と実用主義。中国との貿易を担う人材養成のために日本の教育機関にもかかわらず中国現地の上海の、しかも租界の外に学校を置きます。租界の外に学校を置きますから、実は日中戦争の時に始まって第二次上海事変と関連しますけども、租界の外に置かれていたために租界内の軍事力で守れない。東亜同文書院はインド人の警備員を雇って、それで何とか守ってほしいと言ったんですが、中国側からその警備員は追い払われて、その後中国兵が放火して焼かれてしまいます。三番目の虹橋路の校舎焼かれてしまいますけども。それはやっぱり租界外にあったからということもあるのかなという気もしています。

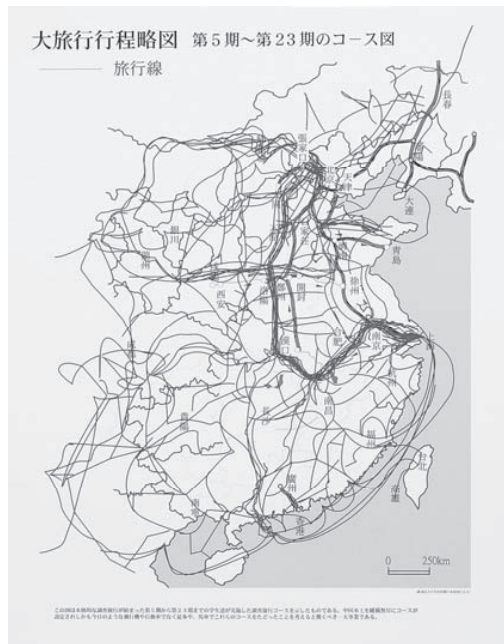
それから、当時一般的に中国語を日本語で読む漢文文化。これは明治の時代の日本の中国理解の手段の一つだというふうに思いますけど、東亜同文書院は中国語では東亜同文、同文というんですけど、言語体系としては別の言語として、つまりそういう意味で中国語を外国語の言語として学ばせた。それからカリキュラムは先ほどちょっと見ていただいたように貿易実務に関連することを重視しております。

それから、三つ目の特色は、中国の社会調査を世界に先駆けて行ったことです。これは東亜同文書院のカリキュラムの非常に重要な特徴になります。最初は日露戦争の前ですけども、日本はロシアの中国進出に対して日英同盟を結びます。そして、イギリス政府から、ロシアの西域(かつてのシルクロードの地域で、現在の新疆ウイグル自治区のとこですけども)及び東蒙古への進出に対する調査依頼が日本の外務省にあり、その外務省の依頼を根津院長が受けて1905年から1906年にかけて、二期生の卒業生の林出賢次郎とか波多野養作など5人をこの西域や東部内モンゴルに派遣して調査させました。彼らは使命達成とこの調査内容を外務省に報告します。1907年外務省から清国調査旅行補助費として三万円が支給されました。東亜同文書院はこのお金を五期生が三年になったときから三年間、調査旅行の費用に充てて、この当時三年制ですので最終年次の三年次に中国各地で調査

を行う。それによって卒業論文を書くということになるのですが、そういう大旅行が始まります。貰ったお金は三年で尽きたものですから、その後は東亜同文書院が何とかお金を工面して経費を支出していますが。ただ、経費の一部は外務省の補助金も支給されています。1905年の調査は、外務省の依頼による国家の委託調査になりましたけれども、その後の調査は東亜同文書院独自の中国に対する調査となりました。これは大変な苦勞をして行っています。この会場に、実は書院卒の小崎先生がいらっしゃるの、小崎先生に機会があればお話をさせていただければと思います。今みたいに飛行機や自動車も普及していない時代ですから、大体馬車や徒歩で動いているわけですね。中国人の泊まる旅館に泊まって、一晚中ノミやシラミに襲われて寝られなかったとか、そういう体験をしつつ、数人あるいは5、6人で一班を編成し、ライカのカメラを持って農村を移動して調査をする。これはすごいバイタリティーだと思いますね。私どもの現代中国学部の学生も二年度に中国の南開大学に全員行って、中国語を中国の先生に教わりますが、そこでも一般の中国人学生ではるかに恵まれた宿舎の生活なんですけど、彼らは色々面食らっています。でも、彼らに言います。今、日本が一番便利な国だ。それを自覚して中国で生活しなければ中国との付き合いなんかできない。ましてや東亜同文書院の先輩はもう君らと比較できない。本当に歩いて、徒歩で移動して、あるいは馬車に乗って中国人と同じ物を食べて、同じ旅館に泊まって、それで調査を行った。もちろんこれは実は書院の先輩がお手伝いをしたりというようなことはあったんですけども、すごいバイタリティーだと思います。調査の対象は、始めはビジネス関係でしたが、その他の分野での地域調査に広がります。これは指導者として経済地理学を専攻した書院の馬場鉄太郎という先生の功績が多い。1918年には中国研究をすることで支那研究部が設立されて、これが学生の調査旅行を指導することになります。この図は、ここにいらっしゃいますけど、藤田先生が大旅行の実際のルートをたどって作られたもので



す。第5期から第23期、1905年から23年の時期ということになっております。太線のところが何度も行ったところ。この白いところをちょっと動くだけでも日本の比にはなりません。こういうところを歩いて、それをまとめて報告をしているということをやっています。



そしてこれが、彼らの出で立ちです。かつてのアフリカ探検という格好みたいな探検帽みたいなのかぶって、白い服で。こういう服で移動すると、これは外国人だって一目瞭然ですが。それでも、こういう格好して中国の旅館に行ってミヤシラミにたかられながら一生懸命調査をした。大したもんだというふうに思います。それで、中国側はどうしたんだということなんですが、清朝政府およびそのあとの中華民国政府は執証



という許可証、これは実質的にはパスポートの役割を持ちますが、これを発行して、そこには学生たちの訪問先が書いてあり、そうすると中国側はどこへ行くかって最初分かっていますから、ルート沿いの清朝でいうと知県を、民国になると県長と言いますが、こういう人たちに事前に連絡して。それから、学生たちはまず現地へ行く。その県内の旅行することの許可を得た。中には書院生のために、県の下にある武力を、つまり治安が悪い場合に護衛に使ったこともあったと言われています。この時期、中国の治安は大変悪く土匪と言われる匪賊、これは元々農民なんですけど、食わんがために盗賊行為をやって、金持ちから人質をとって、身代金をせしめるとか、あるいは金目の物を奪うとかやっています。これは各地にいる。それから先ほどの辛亥革命や1924年以後の国民革命の勃発、さらに1910年代以降、国民党が全国統一するまで、つまり1928年までの軍閥混戦期ということで、各地で内戦が起きてるんですけど、そういう中で、ひとりの事故もなく大旅行が行われています。但し、満州事変が始まると中華民国政府は執証を発行しないため、学生たちの調査先の多くが満州となります。これが執証です。一部残っている。ここに写真が貼ってあります。これを持って各県にいくと知県なり県長が色々世話をしてくれました。これを持って移動していたんですね。写真がちゃんとついています。



それから調査報告、これを基にして調査報告書が出ています。例えば、『支那経済全書』。これは1907年から1908年に出版ですけど、第1期生から第4期生までの調査報告を基にして書かれました。各省別の状況が書かれた『支那省別全誌』、これは18巻でほぼ各省網羅できたんですけど、後の『新修支那省別全史』となると9巻で途絶しちゃいます。ただ今でもこれは、資料的には価値があるということで、日本でも台湾でも復刻されています。台湾の場合は海賊版ですが、それをやっても需要があるということです。あと、東亜同文書院の刊行物として、名前が何度も変わるんですけど、機関誌扱いが『東亜時論』、『東亜同文会報告』、『支那』。これは機関誌だと思います。それから支那研究部の雑誌として『支那研究』が後に『東亜研究』になり、東亜同文書院は各種の『年鑑』を発行しています。

4つ目の特色として、日中連携を目的とした中国人人材の育成ということです。東亜同文会が東京同文書院を設置したというのは、先ほど申し上げた通りですが、最初から中国人の人材養成に熱心でした。それが徐々に、1919年の五四運動等を経て、中国人留学生が減り、ほとんど東京同文書院に入ってこないという中で、直接的には帝国議会の決議を受け、外務省は東亜同文会に対して東亜同文書院内部に中国人教育のための付属実業学堂を創設せよという命令を出します。その時に丁度これは3番目の校舎になるんですけど、徐家匯の虹橋路の校舎が造られました。先ほどの長崎の仮校舎から1913年に移転した赫司克而路(ハスケイロ)仮校舎、その後徐家匯の校舎、この3番目の校舎に移転します。その一角に中華学生部を作ります。これが3番目の虹橋路の校舎でありまして、第二次上海事変の時に焼かれてしまう。この一角に中華学生部があった。なかなか立派な校舎です。

中華学生部自体は1918年設立されますが、実は東京同文書院がまだ東京に残っているんですけども、ほとんど中国人留学生の入学者がいなくなった状態でした。中国人学生も日本人と同じように全寮制です。1934年の廃止までに約400名の中国人学生が入学しますが、ただ



この時期非常に抗日運動、排日運動が盛んな時代ですので、何で日本の学校に入るんだということが、色々周りから言われたんだと思いますね。そのため、転学したり、退学したりする者が続出して、卒業したのは400名入って、わずか50名です。もともと最初の時、18年に設立したんですけど、19年に五四運動が起き、排日運動が各地で起きる。だから中国現地で学生を募集するのは大変困難です。ようやく20年になって、1年間の予科に6名入って、その6名の学生が翌年、本科に進級するというかたちで始まった。ところが、1925年にもともと青島の日本の紡績工場におけるストライキから始まって、それが上海に飛び火して、それを支援したデモ隊のところに共同租界のイギリス人の警察が発砲したために、排日から排英に変わりました。初発は排日だったわけですけども、非常に大規模な排英運動が起きました。その時に実は中華学生部の中に学生ストに参加したものがいまして、例えば、梅電龍(梅龔彬)という人物です。彼は1925年、国民党上海執行部で働いていた。24年以後、国民党と共産党は第一次国共合作の時期ですので、共産党員は個人の資格で国民党員に参加していますから、共産党員は二重党籍ですが、国民党の中に入っている時には国民党の指示に従うという決まりでした。ただ、彼は国民党から中共に入ります。ただし、このことが後に、1966年からの文化大革命の時に、かつて日本の教育機関に入っていたということも原因の一つだったと思いますけど迫害されました。また1928年5月、国民党の蒋介石軍が北伐をやって、山東省を通過していく時に日本が、田中義一内閣がそれ

を阻止しようとして、日本軍を派遣して済南で中国軍と衝突をする。その時に、東亜同文書院の上海学生連合会は反日委員会を組織して中華学生部に10日間のストライキを要求する。この学生連合会というのは、上海全体の学生の連合会です。その時に中華学生部長だったのが、後に東大の先生だった坂本義和さんのお父さん、東亜同文書院の卒業生です。排日運動なんかには学生が参加するわけですね。日本の領事館警察が黙っていないわけでこれを捕まえる。そうするともらい下げに坂本義孝学生部長が行って、憲兵隊や領事館警察に怒鳴りつけられて、「お前はそれでも日本人か」って怒鳴りつけられた。それでも一生懸命、身柄を確保して戻したという。それが、日本が戦争に負けた後、助けられた学生がのちに国民党の将校になり、上海に入城してきて坂本義孝さんにお礼を言ったという有名な話もあります。

30年代というのは、日本人学生の中にも左翼学生がでてきます。30年11月には学生たちが副院長と教頭の辞任要求を出して、全学ストライキを行っています。当時、中国に行った日本人も中国共産党に入っていましたから日本人でも中国共産党の青年組織、共青团書院支部っていうのに参加して。ストライキやるんですけど、その時に上海領事館警察が書院学生の寮を急襲して、8名の学生を逮捕します。共青团支部は大打撃を受けます。31年9月、共青团支部が再建されて、9月18日に満州事変が始まっていますので、それに反対する対支非干渉同盟、これが12月にできます。これに参加して、日本の侵略運動に反対する運動となる。特に日本軍の上海にいる水兵に対して、反戦工作をやって、それが領事館警察にばれまして。33年、領事館警察が書院学生の寮を急襲して卒業生を含めて19名を逮捕して、これ以後は中共書院支部というのは壊滅して再建されませんでした。書院というのは実は右も左も体外幅広いのですが、只、左の方はこれでもういなくなってしまいました。

このように21ヵ条要求以後の日中関係の緊張、あるいは対中侵略のなかで、やっぱり日中連携してという、この目的は十分果たせない。中華学

生部が廃止に追い込まれたということが、如実に象徴しているというふうに思います。そういうことが実現できる現実的基盤は失っているんですが、今申し上げたように中華学生部は排日運動の拠点となっていく。東亜同文書院には領事館警察は入って来ますが、中国の警察は入って来ません。できないのです。排日運動は逆に言うと、それを隠れ蓑にしたという面もあると思います。只、私はひとこと言いたいのは、そういう日中関係の非常に緊張状況の中でも、やはり日中連携するという事は、書院の人たちは日中戦争中もやっぱり思っている。現実的にはそれが裏切られたり、何かしています。

それから盧溝橋事件後の東亜同文書院ですけど、先ほど第二次上海事変によって書院生は長崎に引き上げ、中国軍によって、第3番目の校舎は接收されていきます。中国調査旅行については、ちょうど戦争が始まった時分には農村調査をやったんですけど、これはさすがに戦争始まったので危ないというので中止になります。但し4年生80人が日本軍に従軍して、通訳従軍をし、大変ショックを受けたというのです。つまり、日本軍の実態を皇軍、天皇の軍隊の実態を知って、略奪や放火をやったのを見てショックを受けたというふうに言われています。校舎が接收されましたので、この長崎に来て、長崎女子師範校舎を借用して仮校舎とします。



実は、これが10月、焼かれたのは実際には11月なんですけど、先ほどお見せした建物の図書館や、中国調査報告書は全て消失します。その後、38年4月、4番目の校舎として上海交通大学の校舎を借用して上海での授業を再開したので、長崎には10月から翌年の4月まで仮校舎を置い



ています。1939年大学に昇格をし、そして43年学徒出陣をして、とうとう東亜同文書院大学の大学生も出兵していくことになります。最後の45年の入学生は上海に行けず、つまりアメリカ軍の潜水艦が制海権を支配して危険だったので、富山の呉羽航空機株式会社の建物に校舎を借用して呉羽分校を開学させます。8月に日本が敗戦を迎え、その後一時呉羽を拠点にした再建の話がありますが、結局それが出来なかったということになります。これは富山の最後の、上海に行けなかった人たちの校舎です。



敗戦後、上海の校舎は中国側に接收されます。東亜同文書院大学は閉校になり、東亜同文会会長でありました近衛文麿、篤麿の子どもですが、彼はGHQによって戦犯に指名され、東亜同文会は建物をGHQに占拠され解散します。そういう中、東亜同文書院大学の教員や学生が中心となり、台湾にあった台北帝大、韓国の京城帝大等々の外地にあった学生や教員が予備士官学校のあった愛知県豊橋市に愛知大学を設立したのは1946年。但しGHQの意向もあって、公的には東亜同文書院と別個の大学として造られます。但し設立の中心となったのは、先ほど学長の最初のお話にもありましたように、東亜同文書院大学の最後の学長であった本間喜一、後の第2代、第4代学長、それから初代の林毅陸さんも東亜同文会の理事ではあるのですね。だから全然関係ない人じゃない。それによって、愛知大学が出来たということですから、東亜同文書院は我々の愛知大学に勤めている者にとっては、前身校となっています。これが現在の東亜同文書院大学記念センターのある木造の建物です。旧軍隊の建物で、2階が愛知大学の旧本館時代は学長が座っていた席があります。



もとは師団長閣下が座っていたという話です。学生を案内して、ここに座らせると学生は大変喜びます。また記念写真も撮ると喜びます。

戦後東亜同文書院大学の在學生や卒業生は、心ならずも日中戦争中に政府や軍部に協力し、学徒動員後は各地の部隊に入営したということで、多くの諸先輩が、いろんな分野で日中友好の架け橋となるような活躍をしておられます。明日、東亜同文書院と愛知大学の両方に学ばれた小崎先生がそのようなお話をされると思います。愛知大学自体もそのような反省から「世界文化と平和の貢献」と、東亜同文書院が上海にありましたので、「国際的教養と視野を持った人材の育成」、「地域社会の貢献」を掲げて今に至っています。特に愛知大学、中国との関係が深いですので、中国重視をしておりますし、東亜同文書院時代の支那研究部の伝統を継いで、国際問題研究所が設立されております。ただこれは、もともと中国問題研究所としたかったんですが、GHQをおもんばかって中国をつけなかったと言われております。先ほど学長から話がありました『中日大辞典』、あるいは大学院に総合的大学院としての中国研究科、そして学部では現代中国学部を作るなど、中国研究を重視しております。他の学部もあるわけですから、国際的なことについては、国際コミュニケーション学部があり、そこでもフィールドワークやっています。もちろん現代中国学部でもやっております。そういうかたちで今に至っております。

最後にまとめですけど、まさに現代はアジア経済の発展が目覚ましく、かつ文科省もグロー

バル人材の養成を大学に求めており、愛知大学もグローバル人材養成のプログラム採択されておりますが、そういう中で100年以上前からアジア主義的性格、現地主義と実用主義、実際に現地に行つての調査、さらに日本人だけではなく、日中両国人材の育成という、これらは現代の時点において、とりわけ日本のアジアの向き合い方には大変大きなヒントを与えていると思っております。少し時間を超過したと思っておりますが、私の話を終了させていただきます。ご清聴感謝致します。

**小林** 馬場先生、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、馬場先生にお聞きしたいことがございましたら挙手をお願い致します。

**質問者** 貴重なお話ありがとうございました。最初のお話で横山先生からちょっと触れられたんですけど、現在、長崎市で市史の編纂をしております。私はその仕事に若干関わっていて、先生がお触れになった長崎に日中戦争の時期に書院が移動してまいります。その時に私の知識というのは、書院の方から発行されている大学誌以上のものでもなんでもないので、移動して福田屋という旅館に本部が置かれて授業等も行われていましたね。もちろん、桜馬場のほうの教場で。その際に、講師だった中国人の程先生という方が自殺なさったということが大学史の中に触れられております。その程先生は授業等で中国語を教えられていたんでしょうけども、広州上陸作戦に参加していた先生がちょっとお触れになった通訳従軍の一員であった長崎の県費派遣生の石井君という方が戦死すると、桜馬場の今の中学の場で、近衛ですね、軍関係とかいろいろな方が集まって盛大な葬式がこの時にあった。その時の石井君なんかの同期生の回想が載っているわけでありまして。記録としてそれを読むと、程講師が自殺をした理由は、日中の狭間で大変に心理的に圧迫を受けたと。この長崎で、半世紀以上たつわけですけれども、私は記載事項を読んで、大変に感慨深いものがありました。先生にちょっとお聞きしたいことは、

東亜同文書院で日中戦争の時期など、中国人の講師が学院の中でどういう立場にあったのかというようなことが、もしお分かりでしたら教えてくださいたいと思います。宜しく願います。

**馬場** 中国人の先生に対して、小崎先生いかがですか。内部での雰囲気というか。小崎先生、ちょっとご紹介をお願いします。

**小崎** 今、おっしゃった中国人の先生ですね。自殺なさった方、これは真面目な先生で36期の藤田先生が、彼は今東京におられますが、藤田先生の話を知ると、その方は長崎にいたそうです。非常に悩んでおられたと。おそらく自分は真面目にやっていたのに、どうしてこんな日中関係が変なことになったんだろうと。心配のあげく、生きていられなくて自殺なさったんだろうと思いますと、あの人は言うておられますね。私は昭和16年に入ったんですけども、同文書院に入ったときには中国人の語学の先生がおられました。何人もおられまして、その方たちは皆真面目に我々によく教えてくれました。日中両国の先生が2人ずつ、中国語の勉強を教えてくれるわけですが、非常に真面目でした。私もそういうことは、日中関係はこんなになってどうなるんだと心配しとったんですけども、その後のことは私どもも兵隊にとられましていなくなりましたから分かりませんが。そういう状況でほんとに真面目に考えた人はそういうことを心配しておりました。以上でございます。

**質問者** お伺い致します。終戦近くだと思うんですけども、同文書院に専門部ができた。専門部の連中も愛大のほうにずいぶんそのまま入っちゃった。何であの当時、専門部をわざわざ作らなくちゃいけないのか、その目的と専門部ができた年号が分かりましたら教えて下さい。

**藤田** 明日またお話しすることになるかと思いますが、基本的には、書院が大学へ昇格しました。戦前の旧制大学のかたちになりますけど、予科があって、その上に専門部ということになり

ますね。その結果、伝統的な大旅行が各先生のゼミ単位で行われることになって、全学一緒にやるようなかたちではなくなって、かつての東亜同文書院時代の伝統が少し変わってしまうということで、大学は大学で昇格していいんだけど、かつての東亜同文書院の流れを受け継ぐ学校もやっぱりいるんじゃないかということで、東亜同文書院の専門部というかたちで昭和18年にできたのです。

**質問者** 実は上海中学の卒業生でございますが、僕ら軍隊に志願しなきゃならないような状態に入っていく中、僕らの後輩たちがごっそりとその専門部に入ったのです。ちょっと待てよ、というような感じで、ずいぶん入ってしまって、そのまま愛大の卒業生になっている。ちょっとそこどころが分かりませんでしたので、お伺い致しました。ありがとうございます。

**小崎** 私は同文書院に専門部ができたのは、大学に昇格して、予科と学部と2年、3年と合計5年の大学になったんですが。普通の大学では、他の大学みな専門部作っているところもありましたですね。同文書院は、その時もっと拡大したかったんですけども、その事情がああいう状況でできなかったんですよ。専門部を作るのが関の山だったんだろうと思うんです。ただ、専門部は非常に優秀な学生が集まっていました。色々議論はありましたけれども、その後のことは皆さまご承知の通りで、それ以上に私は申し上げることはあまりないんです。学生の身分で兵隊にとられましたから、後のことは分かりません。そんなところでございます。

**藤田** 書院が焼かれてしまった時の学校再建のため、東亜同文書院の中のプランとしては、総合大学科という大きな夢があって、北京へ進出するというような計画もあったんですね。そこで工学系の学部を作って総合化しようと思ったけれど、当時戦争が始まってお金がなくて。その代わりに、北京経済専門学校とか、上海にあった工業系の学校とかを吸収して、最後の2年ぐら

いは、かたちの上では総合大学を作ったっていうような経過もあるんですね。その中の一つに専門部っていうのもあったんじゃないかなと思いますね。

**質問者** こんなことを言ったら失礼ですが、同文書院は、本科、予科を正式なものとして、専門部は後輩じゃないよというようなことを聞くもんですから。ただの偏見とは思うのですが。

**小林** はい。それではお時間の関係もございませぬので、ここで講演のほう終わりとさせていただきますと思います。馬場先生にもう一度拍手をお願い致します。